

1. 愛の鐘

所在：桑津5丁目13-13

桑津小学校講堂前の花壇の中に鐘があります。

この鐘は、昭和30年（1955年）に南鉄筋校舎上に取り付けられたものを平成になってから、ここに移したものです。

教育の根源は「愛」であるとの考えから「愛の鐘」と名づけ、当時は毎晩10時になるとスピーカーを通して鐘の音をながしていました。

同じ頃（昭和33年（1958年））につくった校歌にも「愛の園」という副題がつけられています。

校歌「愛の園」

辻 葩 昇 作詞
野口源次郎 作曲

一、桑津の宮の坐すところ
学びの庭に花かおる
仲よしこよし愛の園
校旗は招くはためきに
結ぼうわれら 桑津校

二、明るい瞳すむところ
生いたつ力みなぎりて
誠の道を日にすすむ
希望は燃える難波津に
励もうわれら 桑津校

三、輝く雲のとぶところ
伸びゆく友ら胸はりて
あゝ縁なす国はらに
新日本のゆくさを
なおわれら 桑津校



2. 野鳥が集まる公園

所在：中野 1 丁目 8 ～西今川 3 ～ 4 丁目

大阪メトロ谷町線駒川中野駅で下車、東出口を出て、阪神高速に沿って平野方向へ約 300m、川原橋東詰めを左へ、今川と鳴戸川の分岐点辺りから中野町公園・今川公園辺りは、楠・桜・^{いちよう}公孫樹・うるし・楓などが生い茂り、春や秋には種々の野鳥が訪れます。カワセミやメジロ、ヒヨドリ、白鷺、アオサギなども姿を見せます。それに合わせて、野鳥愛好家がカメラや重い望遠レンズを持って次々と集まってきます。

春には、毎年ウグイスがやってきて、最初はたどたどしい鳴き声で、次第に上手な鳴き声になって私たちの心を和ませてくれます。

「鳴いたね」はウグイスの初の鳴き声をきいたときの挨拶です。

夏にはセミの合唱、秋には^{いちよう}公孫樹、^{うるし}漆（^{はぜ}櫨）^{とうかえで}唐楓などの紅葉と木の実をついばみに来る鳥のさえずりが楽しめます。

※ 一方、こんな話があります。 近くの小学校での話ですが、校庭にある水道蛇口に、ネットに入れてぶら下げた固形レモン石鹼がよくなくなります。 見ていると、サギが飛んできてサッと啄ばんで持って行きます。 どうも、黄色のレモン石鹼はおいしいようです。



3. 阿麻美許曾(あまみこそ)神社

所在：矢田 7 丁目 6－18

東住吉区矢田地域の大和川対岸の松原市に食い込むようにストローをくわえた顔の輪郭のような東住吉区の飛地があります。これが阿麻美許曾神社の境内と参道に付随する地域で、阿麻美許曾神社は矢田村の氏神でした。江戸時代の宝永元年（1704 年）大和川の付け替え工事が行われ、矢田村は氏子村民が住む地域と氏神神社が分断されました。川で分断されても両者は一体と見なされ行政上も東住吉区域となっています。

現在の祭神は^{すざんめいたける}素戔鳴尊、天児屋根命、^{ことしろぬしいのち}事代主命と一般に知名度の高い神様が並んでいますが、金剛寺本では 1 座とあり、主祭神名は不明です。式内社調査報告書（河内国編）、381 頁によれば、「神名帳考證」を引用して、主祭神を「中臣の祖、^{あま ひふるいのち}大小橋命の子で阿摩比古命であろう」と推定しています。

^{すむちでら}須牟地寺や中臣須牟地神社が中臣氏に縁が深いことからわかるように、この辺りが中臣家の支配地であったこと、および神社名の許曾は尊称を意味することから、「アマノヒコを祭神とする説」は説得力があります。

一方、「河内国式神私考」によれば、^{もとことき}舊事記に見える「彦己蘆根命（ヒコミソネノミコト）」とする説があり、「河内国造の祖で、丹比の天見丘に葬る」（春原政包日記）とあります。

この説の理由には、「物部氏が滅びた後に中臣氏がこの地を占拠し、祭神を阿摩比古命に入替えた可能性がある」ということにあるようです。

先代舊事本紀巻第十国造本紀には「神武朝期に河内国造に彦己曾保理命が任命された」と見えるので、この神社を物部系の神社に分類する人があり、そこで上記のような仮説が考えついたのではないかと考えられます。

拝殿は文久三年（1863 年）建造のもので、本殿は独特の阿麻美造で昭和 35 年（1960 年）に再建されました。樹齢 500 年の楠木の群は大阪市条例で保存樹林に指定されています。

手洗舎の東側に「行基菩薩安住之地」の石碑が建っています。

行基はその師の道昭とともに、民衆への伝道に力を入れました。しかし、「行基の天美での滞在は行基年譜に見えない」ので、この石碑の裏付けが難しいともいえます。

一方、中臣須牟地神社伝承から、天神山（矢田北小学校や城南学園用地）に行基建造の呉坂院が建造されていたと考えるなら、天神山は当神社から北々東に僅か 1.6km であるので、この神社付近も行基が関与した可能性があるともいえます。



4. 今井戸川と大和川の開削

所在：矢田7丁目（下七郷橋）

生駒山脈と上町台地に挟まれる河内平野と言われる地域は縄文時代には河内湾という内海でした。京都から淀川、奈良から大和川が流れ込んでいました。大和川は現在のように西方向でなく河内方面に流れ込んでいました。

5千年近くの間に川が流し出す土砂によって河内湾は埋まってゆきますが江戸時代でも低地帯で大雨になると大和川は頻繁に氾濫しました。中河内、今米村の庄屋中甚兵衛は河内の村々をまとめて幕府に大和川の付け替え（川の流れの変更）を嘆願しました。生涯のほとんどをかけた嘆願の末、川の流れを柏原から西へほぼまっすぐ大阪湾へ替える工事が認められました。

これについて新たな川の流域となる村々から反対の運動が起きました。理由として新川用地によって自分の農地を失う。新川の流域で洪水の危険にさらされる。東西に流れる川によって南北に通じる川や道が遮断され様々な弊害が出るなどです。いくつかの新川ルートが杭打ちされその都度、該当する現在の東住吉区内の村々は猛反対しました。

結局、現在のルートで工事は強行され、宝永元年（1704年）2月に開始した工事は10月に竣工しました。大工事にかかわらず8ヶ月で完成しました。付け替えにより苦い思いをする多くの農民がいる一方、河内地域の氾濫被害はなくなり、旧大和川跡も新田開発され河内木綿の栽培地となってゆきました。



5. 今川地域振興センター

所在：西今川 3 丁目 6－7

センター内では様々なボランティアが行われており福祉の町のボランティアの活動拠点です。

ボランティアの主な活動としては、今川連合の各町会のボランティア部長会の中に、給食委員会（配食サービス）と友愛訪問（高齢世帯・独居老人の家訪問）があり、これら二つの活動以外に、レモンの会（家事、通院手伝い）ふれ愛喫茶、親子サロン、いきいきの会、グランドゴルフ、ワンダーランド、車椅子の貸し出し、おじいちゃんの料理教室など、各種のボランティアのグループ活動が行われてきました。

これらは、愛のふれあい募金を活動資金として、運営されています。

今川ボランティア部は、昭和 54 年（1979 年）に、大阪市福祉協議会から「地域福祉活動モデル地区」の指定を受け、ボランティアスクールをはじめました。

昭和 63 年（1988）大阪市内で最初のボランティアコーナーを開設、丁度地域内にあった土木工営所が移転し閉鎖されるとのニュースを聞き、地域を挙げての住民の署名を集め、大阪市に要望が認められ貴重な拠点を得ました。

今川では、レモンの会が発足し、支援を求めている人への、個人支援活動が始まっていました。

平成 9 年（1997）大阪で全国ボランティアフェスティバルが開催され、小地域活動「やっぱりお家がええねん」をテーマに分科会を開催、その際、今川地域振興センターが会場となり、全国から 600 人の参加者があり、前庭にテントを張って開催、その後も、各地からの来訪が増え、古さと、手狭の解消に、市役所各部署に陳情、ちょうど、今川ボランティア部が地域福祉モデル地区に指定されてから 20 年目を迎える平成 11 年 11 月に現在の建物に建て替えられました。

現在の建物には、30 畳の畳の部屋と 50 人分の食事サービス用厨房

対面カウンター式常設喫茶コーナー

129 席大会議室・図書コーナーが設けられる等

今川ボランティア部の活動の自由度が更に大きくなりました。

その後、今川社会福祉協議会はボランティア活動の成果が認められて、平成 17 年（2005 年）には、緑綬褒章（団体）を受章しています。



6. 今川

所在：湯里 6 丁目～杭全 1 丁目

狭山池を水源として北に流れていた今川は、宝永元年（1704 年）の大和川付け替えにより水源を断たれ水量が乏しくなりました。その後、昭和 56 年（1981 年）までの今川は、固有水源がないため降雨時以外は水枯れし、ところどころに雨水がたまって腐敗し、悪臭を放っていました。



それでも、昭和の中頃までは沿岸一帯は田園地帯で、フナ、ナマズ、トンボ、シラサギなどが生息していました。

その後、住宅開発が進み、生活排水等による水質汚濁により魚類が住めなくなり、ついに「どぶ川」と呼ばれる程に汚染が進みました。

昭和 30 年ごろに、ほぼ現在の形に改修され、その後改修工事の始まった、鳴戸川と南港通り北側にて分岐、^{うるしづみ}漆堤公園北端にて再合流し、国道 25 号線北側にて駒川と合流後平野川にそそいでいる 1 級河川です。

現在の今川は、河川環境整備事業の一環として、昭和 50 年代中頃から今川の最上流部に、平野下水処理場（平野区加美 2 丁目）の処理水をパイプでみちびいて（約 5.3km）、放水しています。

又、この吐出口辺りには（湯里小学校東側附近）、岩や石を配置して「今川の人工のせせらぎ」がつくられ、人々が楽しく散歩ができる区民の憩いの場として親しまれています。

緑橋あたりではコナギやホテイアオイが繁茂していますが、富栄養を好むオニバスは姿を消しました

（＊長居公園にある自然史博物館の説明では、オニバスは川水が枯渇したり、川底が日光に直接^{さら}曝されると川底の種が発芽し、その機会が到来するまで、土中で 50 年も生存するとのこと。）

北上すると、南港通りの北側で、今川から鳴戸川が分岐します。この辺りでは、鯉の産卵が見られ、30cm 以上もある鯉が群れを成して住んでいます



この辺りから ^{うるしづつみ}漆堤公園あたりまでの今川堤には、かつて、昭和19年ころまでは樹齢100年を超えると思われる漆の並木があり、秋には、今川のうるし堤として、紅葉の名所でした。今は、昭和の中頃に植えられた桜の名所となっています。

7. 今川緑道

所在：湯里6丁目9-12

平等橋を北上し、南港通りと交差する川原橋までの 250m 程の間の南側の堤は、桜並木とユキヤナギが美しいところです。

国道 25 号線との交差手前にある水門までの北側の緑道(2.1km)とは南港通りで分断されて、並木の様子も異なっています。南港通りの北側緑道は南側よりも 9 倍も長い桜並木です。

北側の堤では、戦前はうるし並木とその紅葉で有名でしたが、南側の堤は松並木でした。

この堤は冬には大阪湾の風が定常的に東向きに吹いていたので、並木を背にして、東向きに多くの子ども達が凧揚げに夢中になった場所です。

ご高齢の方々も凧揚げに興じたもので、色々な年齢層との付き合いも経験したものです。



桑津今川堤碑

戦前は漆並木で有名な「漆堤」の名称がありました。

正徳 5 年(1715 年)付け城蓮寺村の堤奉行宛恐書の中に、「うるし堤」の美しさを述べる文言があるので、その頃に既に漆が広く植えられていたことがわかります。

西除川沿いにある矢田 7 丁目の[阿麻美許曾神社](#)や松原市の布忍神社境内や、[駒川](#)沿いの[鷹合神社](#)境内にも川沿いに漆の木が植えられていたことが確認でき、漆は地場産業として、また川堤の補強策としても、今川堤に限らず、広く植えられていたことが分かります。

今川の漆は、戦中の燃料不足に困った住人達が堤の樹木を盗伐し、漆にまで手を付けたので、その全てが消滅しましたが、その後、当時の「うるし」の実を播いて漆を植えているところもあり、昔年の紅葉を楽しませてくれます。

8. よめそしり 今川の嫁謗堤

寺社・史跡・伝承

大阪から平野の大念仏寺に参詣する老婆たちが、この堤まで来ると、付近に人がいないために、かねてからの嫁の不平や不満を安心して語り合ったことから、この名前ができたといわれる。

この場所は桑津から東に向かう道筋に当たり、西から駒川、狭山西除天道川、狭山西除今川の 3 つの川が僅か 250~270m の間を北上し、その堤が都合で 6 本近く存在したようです。

大坂冬の陣には敗残兵が隠れたり（「[今川の這いあがり堤](#)」参照）して、老婆が愚痴を言う場所としては、人目に触れない場所であったと考えられます。江戸中期の宝永 2 年（1705 年）に大和川が開削されて、天道川が干拓され姿を消したものの、「駒川と今川の間



※狭山西除天道川（西除川）の堤

大和川付替後に不要となった旧天道川の川堤は長らく残っていました。例えば、昭和の中頃までは、湯里住吉神社の西側から、南百済小学校の西側には左岸堤の一部が残っており、その上を自転車で走ってスリルを楽しんだ記憶のある古老がおられます。

9. 今川の這い上がり堤（桜とユキヤナギ）

◎ 這い上がり堤

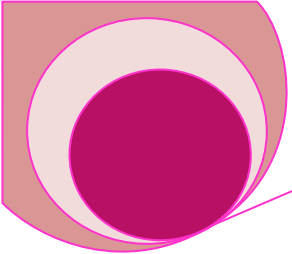
[嫁傍堤](#)とほぼ同じ場所（桑津小学校東側から 240m の間）と思われますが、夏の陣の際には駒川・天道川・今川の三河川が接近し北上していたので、この辺りの川堤は三重の堀（6 本の堤）を形成し、平野で負傷した兵士が逃げ込むのに格好な場所であったと考えられます。傷ついた兵士たちが、平野から逃げてきて、「一番高かった今川の堤をやっとの思いで這い上がった」ことから名付けられたと言われています。現在の水門から南へ 500m ほど上流の辺りをこの名前と呼んでいたとされます。ここには明治初年頃まで名物の「しんこ餅（※）」を売る二軒茶屋がありました。

※「しんこ餅」・・・饅頭ではなく豆餡餅のこと。

桜とユキヤナギ

3 月末頃から 4 月にかけて、今川沿いは桜とユキヤナギが咲き乱れ、ピンクと白のコントラストがとてもきれいです。特に北育和橋から北 220m や川原橋（南港通）から北 250m の眺めは絶景です。





東住吉 100 物語

公園・みどり

10. 今川のうるし堤

所在地：西今川 1 丁目から西今川 4 丁目

大坂では正徳 5 年(1715 年)付けの城連寺村庄屋が堤奉行に宛てた文書の中に「堤上櫨樹多く・・・」が見えるので、この頃には既に「今川のうるし堤」が存在していたことが分かります。

大坂町奉行(大坂城代)土井大炊頭利位(トシツラ)(注){天保 5~8 年(1834 年-1837 年)}が漆産業育成と堤の補強をかねて、[今川](#)や[駒川](#)、西除川の堤に漆を植えたものが、戦争中まで残っていたとの説もあります。

特に第 2 次世界大戦前は現在の川原橋(南港通交差点)から杭全水門付近までの今川右岸堤は漆並木があり、奈良街道からは一望、秋には美しい紅葉を見せていたので、「うるし堤」の名称が区内一円に広がり、名所となっていました。

* 大正 10 年測図、昭和 4 年修正測図の陸地測量部 1 万分の 1 地図のいわゆる今川堤には、南港通り交差点辺りから北へ漆堤公園辺りまで 1.5 km に、潤(広)葉樹の並木の記号が記されています。

しかし、第 2 次世界大戦末期には、極度の燃料不足から、樹液に触れるとカブレるリスクのある漆までも盗伐され、瞬く間に、今川堤の樹齢 100 年を超えと思われる漆の並木が、根っ子まで掘り出されて、家庭用燃料となり、瞬く間に我々の目前から姿を消しました。

同じ頃、今六橋(現西今川 4 丁目)の欄干までも持ち去られ、田舎の土橋の状態になったことから、戦時中の切羽詰まった燃料事情が押し量られます。

今六橋の北 70 メートル付近の河川敷に植えられてある 10 数本の”うるし”は絶滅した往年の”うるし堤”の景観を^{しの}憶び、少しでも復元しようと、戦前に堤の対岸の民家の庭に種子が飛んできて成長した”うるし”の木の種子を、戦後(昭和 30 年代)に蒔いたもので、いわゆる今川漆の孫に当たります。

既に 60 年以上経ち、その間、何度も剪定・伐採が繰り返され、年数の割には大きくなっていませんが、現在その葉(ヒコバエ)が延びてきて、秋には美しい紅葉を見せてくれています。

毎年 11 月頃、ひとたび寒気が訪れると、紅葉のグラデーションが楽しめます。

長居公園の花と緑の情報センターで葉っぱを見ていただいた結果、この”うるし”は、欘で有ることが判明しました。



欘(ハゼ)の木は漆と同じウルシ科に属します。しかし、樹液を漆器用の塗料として利用している漆とは異なり、種子から和ろうそくの原料を採取している樹木です。秋には漆も欘も紅葉しますが、欘の紅葉は漆の紅葉を凌ぐと云われています。程度の差があっても、”紅葉” ”かぶれる”の共通点から、一般には混同され、すべてが”うるし”と呼ばれ今川堤がうるし堤と云われて来たのではないかと思います。